

現も、此の様な障害がある場合には、却つて正當な方向へは向き難くなるのではあるまいか。溢れる如き熱意も、それを素直に實行し、生長せしめて行ける場合にのみ初めて熱意として認められるのであつて、それが行はれなければ、何の効果もない。

勿論、先輩たる同僚に、暖かい氣持で、新任者の意氣を寛容して呉れる態度こそ望ましいが、それは理想であつて、望む方が無理である。従つて、新任者が、その熱意を事業の上に表現して行くには、慎重な心構へが必要になつて来る。

その表現の方法は種々あらうが、根本の基調をなす精神、即ち心構へは、個を離れて、全體へ統合する精神である。

先づ個を棄て、全體とのつながりを検討してみる。其處には、自分の信念に反した形式もあらう内容もあらう、が然し、一應はそれを全體として容認して、先づ自分をその中に溶け込ませて、其處で全體としての方向と、自分の信念との關係を冷かに省察し、果して自分の信念を實行すべきや否やについて、天の時、地の利、人の和を考へるの必要がある。

その場合嚴に避く可きは、指導者たる幹部の確執である。

モローアは佛蘭西が敗れた原因の一として、相互に敵視する指導者達の、個人的衝突が如何に戰

争を阻害し、他國との關係を悪化せしめたかを、如實に書いてゐるが、洵に個人的な惡感情が、事業全體に及ぼす結果の悪いものであることは火を見るよりも明かである。

目的たる全體に照應して、個を生かして行くことの難かしさを感じる時、或人は、自らロボットたることを自任して行く者もあるが、時局は、そんな常套的な、退嬰的な氣分を許さぬから、其處に新任者として之に對處する、高次の心構へを要請せられる譯であつて、之が新任者に與へられた試練として、欣んで之に善處して行かうではないか。(昭和十六年三月)

花に學ぶ

霜柱に凍て上つた庭に出る、其處には、此の春、絢爛と目を樂ませて呉れたサツキがほんとに置忘れられた型で、片隅に押寄せられてゐる。

その冷遇振りに氣の毒な、といふ感じの後に、フト発見したのは、おのおのの枝先についてゐる處の、纏て花となる可き準備のふくらみを発見したことだ。

咲きほこる花が、美しければ美しい程、その準備は、その基礎工作は、堅固であり、用意周到であらねばなるまい。

更にその目に見えぬ基礎の上に立つて、嚴寒零度下の寒冷と闘ひ抜くといふ、逞ましい生存意欲を吾々は見逃してはならぬ。

「伸びんがための屈伏」は誰でもが口にするが、果して此の花に見るが如き、大きな努力が、吾々の日常生活の上に、眞實に實現せしめてゐるのであらうか。

保険の陣營でもさうだ、ある時期を目指して、榮冠を收めるには、その場當りの措置では絶対に不可能である。

四月に花を咲かせやうと思へば、その準備工作は、少くとも、三月前、年改る一月一日に、建設の一步を築き初めねばならぬ。

之は保険のあらゆる部門に適用せられやう、計畫の面にも、外野の面にも、又は集金部の取締の地位にも、班長の地位にも、さては、募集對象となる民衆の上にも、何れも此の用意がなくてはならぬ。

殊に検討したいことは、いざ戦闘開始といふその時迄の間に、戦闘員の一人一人の心持と、部隊長たる指揮者の氣持とが、所謂ピツタリと合つて、各個人が存分の能力を發揮して、然も上下一致渾然一體となつて働いて行ける、闘ひ抜けるといふ氣魄をどうして作つて行くかの問題である。

全體主義の悪い一面は、餘りにも、個々人の働きを壓縮することだ、全體を第一に考へることは勿論であるが、部分を忘却してはならぬ。

映畫「民族の祭典」に見るやうに、ヒットラーは、劇務の中に、數回オリンピックを觀て、「民族全體の爲に働きなから然も個人をすてぬのは日本人のみだ」と語つたと聞く。

保険の戦線に於ては、特に各個人の能力を最高度に發揮せしめ、それを全體の範疇に巧みに統合して行くことが必要であつて、之が爲には、各個人に、何のために闘ふか、といふ信念、所謂肚

を養はせてかゝらねばなるまい。然もその肚を作つての上に、敢然その仕事に歡んで、笑つて飛び込んで行くといふ體制を整えねばならぬと思ふ。(昭和十六年一月)

信は力なり

昭和十六年一月八日、陸軍始め觀兵式にあたり、軍として、『戰陣訓』が發せられた。

それは戰場に於ける道義を昂揚するため、軍人に賜りたる勅諭竝に典令に基いて、具體的實踐の徳目を、集團、個人のそれぞれの場合に互つて述べ、國體觀、戰爭觀、死生觀について、その神髓を體得せしむる爲に書かれたものである。従つて吾等軍人ならざる者であつても、國民座右銘として、之を心に深く止めて處世の指針として、之を味讀すべきであると思ふ。

その一の例を引くならば、本訓其の一の第七、必勝の信念として、『信は力なり。自ら信じ、毅然として戰ふ者常に克く勝者たり』の一節がある。吾等保險人として、特に保險戰線の指揮者たる者にとつて、此の信は力なりの言葉こそ味ふ可きではあるまいか。

新しい募集面を開拓するにしても、又新しい集金方法への展開を圖るにしても、指揮者たる者に、一體此の仕事は成就するか否かの疑があつたり、或は難かしければ投出さうと結果から考へたり、或は難かしいが兎に角やつて見るといふ様な、右顧左眄の煮えきらぬ態度があつてはならぬことである。

どんな仕事でも、初めて仕事を遣り初めるに當つては、その指揮者は、突撃せんとする對象の狀態を充分熟知することは勿論であつて、更に之に對する方策としては、何處迄も仕事に對する信念が無ければならぬ、此の信念は、肚であつて戰陣訓では、信の一字で示してゐる。

指揮者の信念がグラツイたり、不安の念があつたりしたのでは、到底立派な戦は出来るものではない。

然して之は戦に望む第一段階の要素であつて、第二段階の必勝の要素は、戦闘員の各個々人の一人一人に、何の爲に闘ひ、何の爲に行動すべきかについて、確然と方向づけられた信念がなければならぬことだ。

指揮者に從屬する隊員が、何だか判らないが、前へ進めといふから、前へ進むでは不可である。

此の角度で、此の方向に向つて斯く行動する、その肚は斯の如しと指揮者は之を明示し、徹底せしむ可きだ。

よくよく誤り易い行方の實例を擧げるならば、

「自分は斯う思ふが、局長が、或は課長が斯ういふから之で行く、或は、自分としては斯う思ふが上局から斯う通牒して來てゐるから之で行く」となす如き指揮命令形態は絶対に不可である。

物事に對する議論の建方は如何様にでも立つ、殊に現時局の様に、新しい革新的な意圖と熱情を推進力として採つて行かねばならぬ時期に於ては、定められた方針に向つて、假令自分に意見はあらうとも、自我を棄て、全體への統合を考へて行かねばならぬ。然もその進む可き方向については、指揮者は固より、最末端の一人迄十分徹底して居らねばならぬ。

保險の陣營について謂へば局長又は課長の、逞しき積極的意慾が、募集に或は集金に日々外野を馳驅する戦士とその職場での一擧手一投足に迄浸み透り、一體となつて、闘ひ抜くといふ態勢に進められねばならぬと思ふ。(昭和十六年二月)

永劫の生命に立つ

嫌はれた歴史

歴史に還れの際が旺盛になつたことは、寔に結構なことであるが、さて、お互の過去の勉學の科目の中で、およそ歴史位興味の少ない、無味乾燥なものはないと思ひながらも、それが科目として取上げられて居るために、或は點取蟲なるが故に、全く仕方なく勉強したであらうことに氣が付くであらう。

面白くない科目であつても、教育の目的達成の手段としては、之を如何なる方法を以つてしても勉強することを要請せねばならぬことは當然である。

然るに、多くの學生が、所謂歴史なる科目については、全く學校に於て、或は試験の爲のみの勉學として、學窓を出るか、受験を終れば、之を省みず、幾分でも史實的分野の存する、大衆文學や講談の方が興味が有り多數が之に趨る傾向のあることは何を物語るであらうか。

その原因として考へられるのは、從來の歴史なるものが、縦の關係に於ては單なる年代記録であり、横の關係に於ては、日本史、東洋史、西洋史の如く、ボツリ／＼と斷ちきられたものであり、更に考へれば、明治五年學制改革の際、白人の日本を殖民地化せむとする意圖の下に、英米流に編纂せられたが爲であるまいか。

歴史記録の方向

民族には民族としての、民族特有の思想即ち民族精神がなければならぬ。

しかして、歴史は此の民族精神の流れ、即ち民族精神の躍動を基調として、記述したものでなければならぬものである。

民族精神の躍動を基礎として、或は民族精神の比較を根據として描かれた歴史でなければ、それを學ぶ者に感激を與へることは愚か寸時たりともその事實を腦裡に印象せしめることは困難である例へば、吾々は、豊臣秀吉の朝鮮征伐を、單に、太閤一個人の英雄的行爲として、又單に日本と朝鮮との單純なる關係としてのみ知らしめられ、然も個人發展の英雄的意圖のみを強調せられて、兩餘の情勢については、頗る軽く扱つて居るのであるが、事實はそんなものでなく、當時の世界的

情勢が、日本の大陸進出の必然性を抱擁してゐたことについては教へられてゐない、即ち、當時の日本の民族發展が、世界史的な、新なる聯關に立つて、新しき方向に展開せむとする情勢について民族精神の昂揚せられつゝある情勢については教へられないのである。

興味ある歴史

今にして考へることであるが、吾等が過去に於て歴史を學ぶ時、此の世界史的聯關に立つて全日本民族のはち切れる如き、積極的な息吹きを感じしめ、その全體の中の一人の血と、今此處に學ぶ若人の血が、脈々として續くことを教へられたならば、歴史といふ科目は實に面白い學科であつたに相違ないと、今になつて考へてゐる。

歴史は勝利の成功の完成の記録のみではない、悲慘もあり、失敗もあり、未完成もある。その全的記録が歴史であるのである。

歴史を單に一人の英雄的行爲の記録とのみ取扱ひ、一人の個の力を全體から遊離せしめて、他人の迷惑を省みず他人を踏臺にしてでも、一個人が傑出することを、懲慝するが如き教育の方向は、正に、日本をして全體主義國家から、自由主義國家へ轉ぜしめ、聽て殖民地化せしめやうとする個

人主義的教育の意圖的な方向と謂ふ可きではあるまいか。

それ故に、吾々は、所謂學科としての歴史を離れて、民族的、士俗的な息吹きを感じる、講談に走り、傳説に走つて、其處に、我等の血につながる祖先の躍動に、ふれることを喜びとしたのではあるまいか。

日本世界史觀

今こそ、吾々は歴史を新に讀みなほさねばならぬ、その方法を抽象的に述べるならば、縦の關係に於ては、單なる年代記録としてなく、民族全體の生活記録としてあり、横の關係に於ては、狭い、日本とか、東洋とかの範圍で見ることなく、日本と世界の歴史としての聯關と認識に立つて即ち日本世界史的觀點に立つて之を見直さねばならぬ。それが、歴史を學ぶ基礎的態度であらねばならぬ。

更に吾等が歴史を學ぶ理念としては、吾等自らが、歴史を描きつゝある者であるといふ、認識に立たねばならぬことであると思ふ。

永劫の生命

既にして吾等が歴史を回顧するについての理念は、修正せられた、更に、歴史を描く者としての行動は如何にあるべきか——については、その方向も、行動の範囲も、既に吾等が祖先の光輝ある足跡たる歴史に省みて、自ら明かな處であるが、之を現代の青年について検討し、之に向つて要請したいものは、自分達は、脉々として永劫に盡きざる日本民族の、尊い血の流れの連続の一環に立つものであること、此の大切な生きてゐるといふ現在の短い生活面を、より大切に熱情的に方向づけて行くことであらねばならぬ。

彼の十八歳にして執權となり、外敵に對した時宗や、十六歳にして、父祖の血を自らの行動に移して、遠く奥州に旅をした牛若の血と、今の青年諸君の血と、何の繋りもないと、誰が斷言出来やうぞ。

永劫に生く可き民族全體が、歴史を描く者に對する要請、それは一に百難に動ぜざる熱情的な行動であり、歴史として残る必然性は之にのみ因ると信ずるものである。(昭和十六年八月)

大震災と防空

大震災、大正十二年から今年は十八周年に當る。その頃、現業第一線に活躍した人々が、年毎に減つて行くのと同様に、その頃の記憶もますますうすれて行くのは寂しい。

ひばち

焼跡に立てられたバラツクの寒さを凌ぐには、火鉢が足りない、焼跡を探し歩いて電氣焔爐のやけ残りを拾つて来て火鉢替りて使つて、カンカンとその縁を叩いて給仕君を呼んだり、震災の恐ろしさをも忘れた様に、流行歌の拍子をとつたり、その度に、代用火鉢は、特別な役割を果たした。

『之はいゝ記念だぞ、わしは轉動するとき忘れずこいつを持つて行くことにしよう……』
『よからう持つて行けよ、その荒削りの格好が、君に似てゐる』

などと、語り合つたものゝ、いざ轉動となれば、その儘に終つてしまつたが、それにしても、事務繁忙に連徹の疲れで、コクリコクリの居眠りの末に跨火鉢の足をふみ外して、左の向ふすねに受けた火傷のあとは、未だに残つてゐる。淺ましいことだが、この傷を通しての記憶だけは未だに消

えぬ。

てさげ金庫

機跡での事務開始、何から何まで無いもの盡しである。現金の受拂にだけは、何か蓋のあるものでなければと物色したが何處を探しても無い、ある譯がないのである。

数日の後、形ばかりの手提金庫を持出すと、

「それ許りは止せ、K君（前主任）が、最後迄守り通したらしく、頭を此の邊につけて無念の最後を遂げたのが、今でも目に残つてゐるから」「いや、それなら猶更、わしは之を使ふことにしやう、K君の心残りの分迄も、私は働き出すよ、然も、無事故を祈りながら執務するよ」

「それもよからう……アツ又餘震だ君がそんなことを云ふから又一ゆれだ」

あの年は、秋を楽しみ餘裕などなかつた、氣取りたい盛り of 若者が、夏帽子を十二月迄被り夏服から一足飛びに冬服に着更へたことだけでも、如何に物資が不足を告げたかが知られやう。

砂糖が少いの、野菜が足りぬなどの不平は、それが、日常の話題であると謂へばそれ迄かも知れぬが、餘りに我慢がなさすぎはしないか。

玄米の握飯に、鯨の鱈詰肉を添へて食べて、籠城連徹で仕事をやつた遅ましさは我ながいと思出である。

通路

ガラガラツと來た、全く何等の豫報も、警戒もない處を、襲はれたのだから慌てるのも無理はあるまいが、その混亂の中で自分の机上での、一番大切な書類を、手際よく纏めて楮その上で後から逃げて來る人の、逃げみちの、邪魔にならぬやうに、通路の椅子を机の下に押込みながら、然も素早く逃れた女子の事務員さんが居た。

使ひかけたであらう日附印一本を、逆手に持った儘、係の指揮もせず、うろたえてゐた男の主任さんと、好一對の對照だつた。

あんな時にこそ、人の眞價がはつきりするし、平素から吐は練つておかねばならぬ、と熟々感じたことだが、さて、その感心な女子事務員さんは、名實共に立派な人の夫人となられて、幸福な生活に入つてゐる。

まことに、平素の教養と、聰明さによつて築かれたものであらうが、それにしても、非常退去の

ときには、立つ、机上の片付け、重要書類を持つ、椅子を机の下に入れる、順番に退去、こんな工合に平素から訓練として練習しておきたいものである。

簡保バリカン

資本は腕に覚えの、理髪屋さん、ガラツと来て、一應は持出した家財を、火に追はれながら一品棄て、二品棄てて、それでも荷物に執着を持った人々が、橋から轉り落ちたり、焼けただれたりするのを見て腕さへあればと、最後に仕事道具のバリカンを、泥水の中に棄てて、その手で、頭へ、からだへどぶの水を掛けて、劫火の身に及ぶのから逃れて、辛くも一命を取り止めたが、さて裸一貫になつて之から捲土重來の腕によりをかけて、復興を圖らうと意氣込んだものの、身につく金は、全く、一文も無い始末、頼る人は無し、結局、簡易保険の非常貸付で借受けた二圓也（その時は三十錢の貸付もあつた）の中で、八十錢の古バリカンを買込んで、街頭理髪を始めたのが、大當りに當つた。

二年後、空々たる店舗に、床屋のアメン棒も美しく復興した店に、どつかと坐つた主人が、

『旦那！ あつしや、此のバリカンを保険バリカンと名前をつけて、あつしの處の家賃に致します』

——まあ簡易保険の御縁で永くつきあつて下さいよ』

それ以來、私は少くも二月に一度位は、その床屋のある「月島への渡し」を渡つた。

それも十年餘り續いたが、私は都落ちをして四年、去る者は日に疎しのたとへに洩れず、無沙汰が續けば、益々高くなる敷居の例で、再び東京へ歸り月島へは可動橋がかゝつたが床屋へは未だに訪ねないが、保険バリカンを、簡保バリカンと呼かへて貰つたり、その上、

「餘り見限るもんぢやねえよ、あんたまだ簡易保険をやつてるんでせうに」

と、元氣な挨拶を一浴びしやうと考へてゐるが、二十五年の間、私を抱擁して呉れ、自己のいちとした來た簡保からはどうあつても離れたくはないと思ふ。

けんぼ

震災の時の非常貸付は、簡易保険局だけで、取扱はれた。郵便局の窓口へ来て、

『わしは、此の局へ拂込んだんだから、此處で貸しなさいよ、よそでは、元帳とかげんぼとかが無くて、仕事はやれんでせう』

之には參つた、之に詫びをする心算でもないが、保険局への道順と、持参すべき書類の案内を、ガリ版で反古紙の裏に印刷して渡した處頗る好評だつた。

その後、保険事務の組織が、中央集権主義から離脱して、地方への移管となり、各局に契約原簿が設けられ、總てがその契約原簿中心に處理せられるやうになり、いざといふ時は、第一に契約原簿を持出しておけば、萬事好都合といふ状態になつたことは、加入者のためにも、従事員のためにも、結構此の上ないことで、感謝にたえない。

然し、此の逼迫した現情勢下、電話で、

『貸付金の非常即時拂の事務取扱手續は出たんですか……』

『去年の八月八日、通第七五二號で出てゐます、なるだけ早く御研究下さい……』
の應答をきいてゐると、感度の鈍い私の神経すら一寸いらいらする。

いざといふ場合、國民大衆のふとこに残るものは、十八年前も今日も、簡保の領收帳と、郵貯の通帳位であらうことを考へるとき、保険證書がなくても、非常貸付の出来ることは勿論だが、契約の證據證券たる保険證書がなくても、非常即時拂をやりたいとさへ、願つてゐるものであり、債權確保は債務履行と併行する譯だから、現在の事務機構の範圍で、契約原簿へ貸付金額を監査票から轉記するか、或は、外にカード式の貸付原簿でも調製して萬全の策を採ることが肝要ではあるまいか。

さきもり

劫火の中をくぐり脱けて、現金も、重要書類も保守し得て、先づ安心となつた時に、フット、家族のことは、家のことはと、初めて口に出して、案じ初めたのが、自分達同僚全部のやり方だつた。

斯んな状態では、イザといふ時の役に立つかと、時々酷評されるが、我々吏僚の末輩でも、變に應じて、減私奉公の立派な働きが出来得ると、自らをも恃み、同僚をも信ずるものである。

日本の歴史を回顧して、常に思ふことであるが、古くは佛教の傳來から、封建末期の勤王佐幕にしても、政治の争をよそに、日本全體の行手が常に嚴然として窺はれることである。

講演を聴く、新聞を読む、オヤツの少い子供からねだられる——此の現實から離れて、深夜心ゆくまゝに、吾等の先人の建設した歴史を読むとき、私は此のありがたい皇國民たることに、無限の感謝を感じて涙無きを得ない。

まことに、自分達の血と、彼の醜のみたてとして勇躍出征した防人の血とつながりがないと誰がいひ切れやう。

自由主義の大きな潮流に押流された吾々は心ならずも、自己本位の生活様式を打ちたてなければ、

ならなかつた、それこそ、餘儀なくされたといふ言葉でつきる。

それが今日となつて、何とか脱皮しやうとしてゐるのだ。

此の逼迫せる今日、皇國日本が進む可き必然的な進路を今更に知らぬものはない筈である、生は一瞬であるが、民族の血は永遠に流れる、私達はこの時代の歴史を後代の人々に讀んで貰ふ時に、自分達の今迄の過失は過失としても、之から先の覺悟で皇國民の譽を汚したものでないこと丈は信じて貰へる様な、それがたとへ渺たる一存在であつても何かなしとげて死にたいと熱願してゐる。

六法全書

火に追はれて、上野の山に逃げながらも、六法全書を肌身離さず持つて、あの混亂の中にゐても勉強を忘れず高文突破の先輩があり、未だに若い人々への教へ草となつてゐるが、昨今、若い人々の間に讀書慾が大いに昂り、業界、特に狭く簡保の同僚達の中に、その傾向が著しいとの聲を聴くことは、まことに頼殿しい。

今後の防空非常時下に、若い人の懐中から離れぬものは、さて、皇國歴史か、萬葉か、或は、日本世界觀に立つ興亡戦史か。

防空演習

防空演習ともなれば、各局の保険とか替爲の部員は、常時揃つて居るからとて、大方の向が防火班か、防壽班を振充てられるらしく、見受けられるが、それでは聊か實際と齟齬しないであらうか假にある地區に於て、被害を受けた場合、國民の要望に應えて、非常拂や非常貸付のために第一に駆出さなければならぬのは、保險爲替課員であらねばならぬ。

今度の演習で、或地域の被害現示に照應して、非常拂練習の措置でもやつて見やうとした局があつたらうか。(昭和十六年八月)



昭和十七年二月一日印刷
昭和十七年二月十日發行

保險現業の革新的方向

定價 壹圓八拾錢
(千一〇錢)

著者 堀内林太郎

發行者 佐々木義雄

東京市四谷區南町七六

印刷者 桐谷網

東京市本郷區駒込上宮
士前町二八

東京市芝區新橋二丁目三〇

發行所 逓信學館

振替東京一〇八一一番
電話銀座三〇七一番
會員番號一九〇一二番

東京市神田區淡路町二丁目九

配給元 日本出版配給株式會社



923
207

